

# シャン仏教チョーティ派史素描-東南アジア大陸部における 仏教実践の事例研究

## Introductory Sketch on the History of "Coti" Sect in Shan Buddhism : A Case Study of Practical Buddhism in Mainland Southeast Asia

村上忠良

17世紀に上ビルマで成立したとされるビルマ仏教の一宗派チョーティ (Coti) 派は、ビルマの王の弾圧により18世紀半ば以降ビルマの仏教界から姿を消す。しかし、ビルマ (ミャンマー) のシャン州や中国雲南省徳宏地区に居住するタイ系民族シャン (Shan) の人々の間では、現在もチョーティ派の仏教が実践されており、チョーティ派はシャン仏教の主要な宗派の一つとなっている。本稿では、東南アジアの大陸部に見られる上座仏教の実践形態の一つとして、ビルマの土地に生まれ、その土地を追われ、現在は主にシャンの人々の間で継承されているチョーティ派の歴史を概観し、その特徴を明らかにする。

キーワード：ビルマ、シャン、仏教、チョーティ派、歴史

### 目次

I はじめに-問題の所在

II チョーティ派とは

1. チョーティ派の描かれ方
2. 『チョーティ派の歴史とその慣習』について

III チョーティ派の歴史

1. 初期チョーティ派
2. シャン州への移動
3. 遮放での繁栄
4. 移動と分裂の時代-ナムカムを中心に
5. ムンミットからモーニンへ

IV 考察

V まとめにかえて

## I はじめに—問題の所在

インドからスリランカを経由して東南アジアに伝わった南伝上座仏教は、現在ビルマ（ミャンマー）、タイ、ラオス、カンボジアにおいて統一的な国家サンガ（出家者の組織）を形成している。但しこれらの国家サンガ制度が整備されサンガが統一されるのは、それぞれの国家の歴史的経緯により時間的な前後があり、また統一されたサンガといってもその統一を維持する国家の拘束力にも差がある。しかし歴史的に見て、上座仏教の受容当初から、王や統治者によるサンガの庇護とサンガ側からの王や統治者の支配の正統性の付与という相互依存関係が、東南アジア大陸部における政治と宗教の関係の理念形として長い間存在してきた。つまり、東南アジアの上座仏教社会においては、政治権力の庇護の元での宗教的統一性が確保・保証される伝統が存在してきたことを意味する（cf. 石井 1970、Mendelson 1975）。

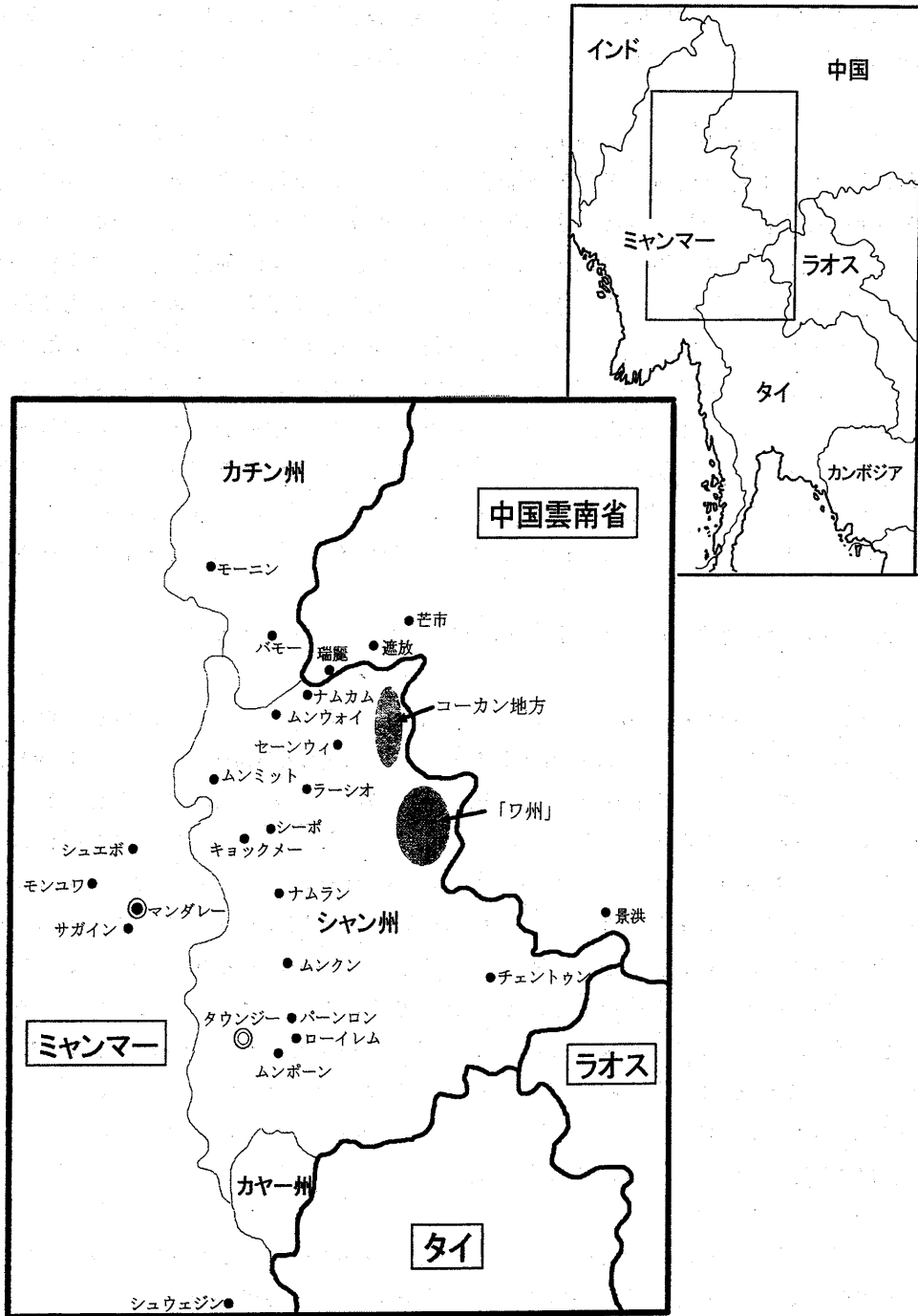
しかしその反面、このような統一性の確保は、統一されないもの、統一を脅かすものの排除という形で達成されてきた。時の統治者・支配者と相互依存関係にならない、あるいはその正統性を認めないような僧や宗派は、その支配圏から排除されてきた。圧倒的な権力をもつ統治者・支配者は自らの支配の正統性を証明するため、様々な僧や宗派を「異端」としてサンガから排除し、その「浄化」を行ってきたのである。

本稿で取り上げるシャン仏教のチョーティ派は、このような時の支配者からの迫害を受けた歴史をもつ宗派の一つである。17世紀にビルマ仏教の中で興ったチョーティ派は、18世紀に王の迫害によってビルマの地から姿を消すが、その後隣接するタイ系民族シャンの居住地へ活動の場を移した。現在シャン州と呼ばれている地域は、当時シャン人の国主が統治する盆地国家ムン（moeng）が複数並立しており、各ムンはビルマ王朝の間接的な支配下にあったが、比較的自律的な統治を行っていた<sup>1</sup>。そのためチョーティ派の僧団はビルマの王から直接的な迫害を受けることはなく、シャン州北部から中国雲南省徳宏タイ族ジンポー族自治州（以下徳宏地区と略す）にかけての地域を移動しながら、僧や見習い僧を得度し、また在家の信者を増やしていった。これらの地域では現在においてもチョーティ派の寺院を多数見ることができ、ビルマの地からシャンの地へという移動とシャン州内での移動の歴史を概観し、このような歴史的経緯の中で形成されてきたチョーティ派の特徴を明らかにすることが本稿の目的である<sup>2</sup>。

## II チョーティ派とは

### 1 チョーティ派の描かれ方

17世紀に上ビルマ<sup>3</sup>で興ったチョーティ派は18世紀には王の迫害を受け、その後ほどなくビルマ仏教界から姿を消したとされ、現在のビルマ仏教の中ではその歴史や教義、実践形態について知ることは不可能である。しかし、王の迫害から半世紀ほど経った19世紀に



チョーティ派の活動範囲地図

ビルマに滞在していた西欧人たちが様々な著作の中でチョーティ派について言及している。19世紀の初頭にキリスト教布教のためにビルマを訪れたサンジェルマーノ神父 (Father Sangermano) はチョーティ派について次のように記している。

「彼らはビルマ生まれ (Burmese origin) ではあるが、その教えはゴータマの教えとは全く異なるものである。彼らは輪廻転生を否定し、各人は死後すぐに自らの行為についての報酬と罰を受け、その罰と報酬による死後の境遇は永遠に続くと考えている。ビルマ人のようにすべての出来事を運命に帰す代わりに、彼らはこの世の創造主、全知全能のナツ (nat 精霊) の存在を認め、仏塔・寺院、サンガ、仏像を軽蔑する。最も熱心な宗教の護持者である現在の皇帝 (ボードーパヤー王：在位 1782-1819) は、一挙にこの宗派を絶滅する決心をし、彼らの居所をすべて探し、ゴータマを崇拜させるよう命令を下した。(中略) そのとき以来、彼らは身を潜めたままであり、それゆえ彼らがどのような信仰形態をとっているのかを調べようにも、私は彼らの誰一人とも会うことができていない。私が知り得たことといえば、この宗派はまだ存在しており、メンバー同士は連絡を取り合っているということである。」 (Sangermano 1833 : 111-112、カッコ内は筆者による補足。)

また、第二次英緬戦争後の英国使節団の秘書ヘンリー・ユールは次のように記している。

「メンタラジー王 (Mentaragi=ボードーパヤー) の治世のあいだ、前世紀の終わりから今世紀のはじめにかけて、自由主義・広教派の (latitudinarian) あるいは異端の教義が、ビルマ中の知性のある男女のあいだでかなりの範囲で広まった。このことについてはジャドソンが日誌や手紙の中で繰り返し言及している。彼はそれらの信奉者を時には半自然神論者 (semi-deists)、時には半無神論者 (semi-atheists) と呼んでいる。しかし、そこでほのめかされている僅かな情報では、彼らの教義の正確な概念をつかむことは困難である。実際個人によってかなり差があるようである。(中略) ある事例では、この宗派の教説は単に世界懐疑主義の形態をとる。別の自然神論に近いアプローチでは、ゴータマを全く否定する。ジャドソン<sup>4</sup>が言及しているこの宗派はおそらくサンジェルマーノ神父のいうゾーティ (Zoti) と同じものであろう (中略) 私はこの自然神的セクトは依然多数いると聞かされたが、彼らについてのどのような情報も得ることはできなかった。」 (Yule 1858 : 241-242、カッコ内は筆者による補足)

これらのチョーティ派についての記述は直接的な観察ではなく伝聞情報に拠っており、しかもその情報はチョーティ派を迫害する側から得られた可能性が高いため、これらの記述が当時のチョーティ派の教義や実践をどこまで正確に捉えているのか疑問である。ここでの「自然神論」、「自由主義・広教派」、「仏塔、寺院、サンガの軽蔑」が具体的にどのような教義や実践を意味するのか、これだけの記述では不明である。しかし19世紀には、

チョーティ派はビルマ仏教界では外国から来た西洋人が直接観察できるような存在ではなく、隠れた「異端の宗派」として語られていたことが分かる<sup>5</sup>。

更に時代は下って、19世紀末にイギリスの植民地行政官であったJ. ジョージ・スコット (J. George Scott) は、19世紀にビルマ仏教界には幾つかの非主流派の宗派があり、それらはパラマット (Pramat) と呼ばれているとし、「これらのパラマットに最も近いものとしては、今日のチョーティ派が代表的なものであろう。このチョーティ派はシャン州のある地方ではかなり強い勢力を持ち、本部は中国国境に近いナムカムにある。また、チョーティ派の信者は乞食 (こつじき=僧のこと) や寺院への経済的支援や敬意も払わなかった。彼らの指導者たちは在家の信仰集団 (lay brethren) と呼ぶべきものに近い」(カッコ内は筆者による補足) としている (Scott 1906 : 376-378)。

人類学者メンデルソン (E.M. Mendelson) は、以上の3つの報告を基にチョーティ派 (と思われる宗派) が19世紀のボードーパヤー王の時代に一般民衆の間で広まり、王より迫害を受けた後にシャン州へと逃れていったとしている (Mendelson 1975 : 73-75)。さて、以上のチョーティ派についての歴史資料は主にビルマの土地での活動についてであったが、次にシャン州に移ってからのチョーティ派についての記述を見てみよう。チョーティ派の実態については、1950年代にシャン州のチョーティ派について聞き取り調査を行ったメンデルソンがチョーティ派在家信者にインタビューした時の様子を次のように記述している。

「我々がゾーティ (Zawti) の村を訪れたとき、(同行のビルマ人) 僧はこれらの人々は(戒律に) 大変厳格で、彼らの僧以外のところへは行かないのだといった。彼ら(の歴史) は300~400年ぐらいであり、王によってビルマ(の土地) から追放されたとその僧は考えている。」

「ゾーティという語はパーリ語の光輝 *joti* に由来する。ゾーティは大変厳格で他派の僧とは交わらない。(中略) 彼らは瞑想の極端派 (extremists) である。僧に篤く帰依する信者は男女ともに、10の悪行を避け、10の善行を行うことが義務づけられている。(中略) 僧はシャン語のパーリ三蔵を使い、黄色の僧衣を身にまとふ。僧の数は少なく、シャン州北部で約100名ほどである。他地域でのことは不明であるが、ゾーティの多くはムンミット (Moeng Mit)、セーンウィ (Saen Wi)、ナムカム (Nam Kham) に住んでおり、これら全ての場所にゾーティの寺院 (kyong) があるが、僧はいない。在家信徒が(寺院の) 建物の維持管理をし、稀に来訪する僧を待っている。葬儀の時には在家信徒の長が面倒を見る。仏日の時のみ、パゴダの前で在家信者の長が本を読み、人々は戒律を受ける。」 (Mendelson 1975 : 231-232、カッコ内は筆者による補足。)

メンデルソンはインタビューによってビルマの土地で迫害されたチョーティ派が主に北シャン州において広がり、シャン仏教の中に伝わり継承されていることを指摘し、戒律や

瞑想に厳格であること、他の宗派と交わらない、また寺院はあるが僧が常駐せず、在家信者が中心となって日々の仏教実践に励むという独特な在家信者組織をもつことを明らかにし、チョーティ派をシャン仏教の中の厳格派・改革派であると位置づけている。但し、これらの記述では、チョーティ派の興り、迫害の経緯、移動の歴史については明かではない。

## 2 『チョーティ派の系譜とその慣習』について

次章では1997年に出版されたカーンカム・サーンサーム氏の著作『チョーティ派の系譜とその慣習』に描かれたチョーティ派の歴史を概観するが、その前に著者と著作についてについて簡単に紹介をしておく。

『チョーティ派の系譜とその慣習』（原題“Long Khoe Coti lae Phing Phasa”）の著者カーンカム氏<sup>6</sup>はシャン州北部の中国国境に近いナムカムの町に生まれ、現在はシャン州北部の中心都市ラーシオ市内で生薬を販売する薬屋を営んでいる。現在77歳の氏は薬屋の仕事を自分の子どもに任せ、仏教教義の解説書やシャンの歴史についての文筆活動、講演活動を精力的に行っている。ラーシオ市の「シャン文字・文化委員会」（Mukcum Lik lae Phing-ge Tai）の会員であり、シャン語によるシャン語辞典（国語辞典）の自家版を編纂し出版している。氏はチョーティ派の在家信者で、チョーティ派僧院における見習僧としての修行経験があり、仏教教理にも明るく、チョーティ派だけではなく、シャンの在家仏教徒の間で広く開かれている「教理研修会」（Poi Thara）では講師も務める。彼の学識は広く知られており、シャン語やシャン文化に関して、数多くの海外の研究者のインタビューを受けたという。氏はシャン語の知識だけではなく、ビルマ語、徳宏タイ語にも通じており、本書はこれらの各言語で書かれた資料を元に書かれている。

しかし残念ながら著作の性格上、著者は参照した歴史資料や文献を挙げておらず、どのような資料を利用して執筆をしたのかを知ることはできない。また、人名や地名といった固有名詞がシャン語で書かれており、現在のビルマ名との対応関係を確認し、人名や地名のすべてを同定することは現時点ではできていない。また本稿では、カーンカム氏の著作で記述されたチョーティ派の歴史上の出来事を、ビルマ史、シャンの民族史、あるいは中緬国境の地域史全体の中に位置づけることができていない。これらの点は今後の課題としたい。本稿では、カーンカム氏の著書をチョーティ派の在家信徒である著者自身による自らの宗派についての歴史認識であると捉え、以下ではカーンカム氏の視点から見たチョーティ派の歴史をまとめ、その内容を紹介する<sup>7</sup>。

## Ⅲ チョーティ派の歴史—カーンカム氏の著作を中心に

### 1 初期チョーティ派

チョーティ派の由来として、カーンカム氏は洞窟に止宿する僧について次のような説話を紹介している。300年ほど前、上ビルマに位置するサガインの近郊の村マイサーンナム

(Mai San Nam) の西に洞窟があり、そこで一人の僧が修行生活を送っていた。ある日、洞窟の前に一人の獵師が通りかかる。獵師はその一日獲物を得られず、何とか獲物を捕らえようと必死であった。獵師は洞窟で瞑想している僧を獲物と思いこみ、僧へ向けて弓矢を3本放つが、いずれも手応えがなかった。不思議に思って洞窟の中に入ってみると、そこには一人の僧がおり、獵師は大変驚く。僧は獵師に対して仏法、特に殺傷戒について教え諭し、その教えに感銘した獵師は翌日妻子を伴って僧に供物を供え、仏法に帰依した。この洞窟の僧はその名をワーラチョーティ (Wala Coti) といい、チョーティ派の始祖となる僧である。チョーティ派の名前はこの僧名に由来する<sup>8</sup>。

ワーラチョーティ僧 (Cao Wala Coti) は、1654年<sup>9</sup>にシャン州南部のムンモー (Moeng Mo)<sup>10</sup> の国主である漢族の父とビルマ族の母の間に生まれた。7歳の時に上ビルマのカルンナンチャーム (Kalung Nan Khyam) 寺院に寺子<sup>11</sup>として寄宿し、15歳の時に見習僧となり、20歳で正式に僧として得度した。僧名をワーラチョーティという。ワーラチョーティ僧は教学に励み、涅槃への道を求めて様々な師の元で修行をする。そのうちに、マンドレーの西、モンユワ近隣の町チョッカー (Kyokka) にいる高僧の噂を聞き、彼の元を訪ねる。さらにその僧からパガンに涅槃に到るための真理が書かれた教学書があると聞かされ、パガンを訪ねる。その書はブッダゴーサ長老の論蔵註釈書『ヴィスツディマツガ』(清浄道論)で、ワーラチョーティ僧はこの書に拠りさらに修行に励んだ (カーンカム 1997: 9-10)。

1692年には、アンワ (アヴァ) の王である「日曜王」 (Khun Luk Wan Tanang Noi)<sup>12</sup> とその一族がワーラチョーティ僧 (当時 38歳) に帰依する。その後継者であるマンラーイシーハーチョー王 (Mangrai Sihakyo) もワーラチョーティ僧に帰依し、僧のための修行場所として洞窟を用意し寄進した。1716年にはマンラーイシーハーチョー王の王妃がその洞窟の改修を行った。このようにしてワーラチョーティ僧は洞窟において修行生活を送ることとなったので、人々から「洞窟の僧」 (Cao Umang) と呼ばれている (カーンカム 1997: 12)。

18世紀初頭には、8人の僧がワーラチョーティ僧の高名を聞いて集まり、弟子となる。さらにビルマの各地からの7名の僧が集まる。後者の7名の中には、ワーラチョーティ僧の没後チョーティ派の二代目の長となるナンタマーラー僧の名も見られる。これが最初期のチョーティ派僧団である。ワーラチョーティ僧が50歳の時には、当時のサンガの戒律監査役ウィネートー (Wine Tho)<sup>13</sup> がチョーティ派に敵意を持っていたが、そのウィネートーもワーラチョーティ僧の「力」を恐れて何もできなかった。

1732年にナンチャ王 (Khun Nan Kya)<sup>14</sup> が亡くなり、チャーサパター王 (Khun Kya Sapate)<sup>15</sup> が王位につく。チャーサパター王はワーラチョーティ僧を王宮に招き、仏法の教えを請う。王は結局ワーラチョーティ僧を受け入れることができず、両者の関係は悪化した。王も僧の力に恐れをなしてなにも危害を加えることはできなかったという (カーンカム 1997: 12-13)。

## 2. シャン州への移動

ワーラチャーティ僧は1744年に90歳で亡くなる。ワーラチャーティ僧の後、チャーティ派の長となったのは、弟子僧の一人ナンタマーラー僧 (Cao Nantamala) であった。当時の王<sup>16</sup>はナンタマーラー僧を王宮に呼び、問答を行う。王は「(功徳を積むために) 仏塔を建ててもそれは煉瓦と漆喰の塊に過ぎず、豪華な寺院を建ててもそれはチーク材の塊に過ぎないと説いているときいたが、どうであるか」と尋ねると、僧は「そのように説いております」と答えた。積徳のための仏塔・寺院建設が無駄であると言われた王は、チャーティ派をその土地から追い払う命令を出した。

1745年にはビルマ国内に戦乱が生じ、国が荒廃する。戦乱はようやく1747年に収まり、シュエボ出身のオーンチェヤー (Ong-ceya) 王<sup>17</sup>の時代となる。戦乱で乱れた国内を平定した王はサンガの監視役を置き、サンガの統一を図った。このようなことから18世紀半ばのビルマの土地ではチャーティ派は衰退していき、チャーティ派の僧団はシャン州の各地を転々と移動するようになる<sup>18</sup>。ナンタマーラー僧の時代には、チャーティ派僧団自体が上ビルマ、サガインの近くのマイサーナムの洞窟からシャン州のムンポー (Moeng Pawn) 内のモーククムナーラオ (Mok Kum Na Lao) へ移る。チャーティ派の「移動の歴史」の始まりである。カーンカム氏はチャーティ派の移動の歴史を次のように語っている。

「チャーティ派のことを正しく理解しない村長や国主、在家信者たちから迫害を受けたため、チャーティ派はもともとは一つの集団であるにもかかわらず、一カ所に留まることができずに、各地を行ったり来たりするようになった。ビルマの土地を出てシャン州北部・南部の各地へ、さらにシャン州だけではなくシャンが居住する中国の徳宏地区へも到っている。」 (カーンカム 1997: 15)

2代目の長ナンタマーラー僧の後、ピンヤーキッティ僧 (Cao Pinnyakikti) が3代目の長となる。ピンヤーキッティ僧に率いられたチャーティ派僧団は、モーククムナーラオを出て北上し、パーンロン (Pang Long) からムンクン (Moeng Kung) に入り、ムンクン内のタートモーク (Tat Mawk) に一時滞在した後、さらに北上し、シーポ (Sipo) に入り、シーポ内のマンリー (Man Li) やナムラン (Nam Lan) に留まる。しかしそこも安住の地ではなく、シーポ国主の迫害を受けてその土地から追われる。一行はさらに北上し、ラーシオ郊外のホープック (Ho Puk) 村に留まり、そこに寺院を建てる。ピンヤーキッティ僧はこの地でなくなる。

ピンヤーキッティ僧の没後、インターパッパーワティ僧 (Cao Ingtapapphawati) が4代目の長となる。チャーティ派一行はラーシオのホープック村を発ち、ナムカム郊外のマンナー (Man Na) 村に移り住む。その頃シャン州北部の有力国セーンウィーの国主が仏教教義問答会を開き、それに参加したインターパッパーワティ僧の教えに感服し、サンガ



長としてセーンウィー国に滞在するよう招請した。僧はその申し出を辞退し、一行は再びナムカム郊外のマーンナー村に戻り、さらにムンミット内のヒンロン村 (Man Hinlong) へと移動する。そこで1年を過ごした後、マーオ川 (シュエリー川) 沿いを遡上し、現在の中国雲南省徳宏地区の遮放 (Cefang) のコーオン (Kho On) 村へと移る<sup>19</sup>。

### 3. 遮放での繁栄

コーオン村近くのローイレック (Loi Lek) 村の首長セーンチュン (Saen Cung) は山地民タアーン (Ta-ang) で、チョーティ派の僧団がコーオン村に滞在していることを聞いて、インターパッパーワティ僧とチョーティ派僧団をローイレック村に招じた。タアーンとは、パラウン、ワなどの北方モン・クメール系言語を話す民族の総称である<sup>20</sup>。1756年、セーンチュンの招きに応じ、チョーティ派一行はローイレック村に移る。首長セーンチュンの帰依により、ローイレックではシャンとタアーンの両民族の住民にチョーティ派の教えが広まり、チョーティ派の寺院が多数作られた<sup>21</sup>。その当時のローイレック内のチョーティ派寺院全てを合わせると、止宿する僧が300人を下ることはなかったという。遮放国全体でも、このようなローイレック住民の篤信に影響されてシャン、タアーンを問わず、チョーティ派の教えに帰依するものが増えた (カーンカム 1997: 17-18)。これによりローイレックはその後約80年にわたってチョーティ派の中心の役割を果たすことになる。

このころチョーティ派僧団はローイレックに僧団の中心を置きながら、雲南省徳宏地区からシャン州北部にかけての広い範囲を移動している。セーンウィーで開かれた教義問答会でインターパッパーワティ僧に会った「ワ州」<sup>22</sup>の国主に招かれ、僧一行は「ワ州」へ赴く。しかし僧一行が止宿している間に国主の死が続いたのでその地を離れ、サルウィン川を北上しコーカン地方<sup>23</sup>に入り、その地に3年間留まる。その後インターパッパーワティ僧一行はローイレックの首長セーンチュンに請われて再び遮放国のローイレックに戻り、インターパッパーワティ僧はこの地で亡くなる。インターパッパーワティ僧の跡を継いで、ワラタンマー僧 (Cao Walathamma) がチョーティ派の長となる。18世紀末のワラタンマー僧の時代はチョーティ派がローイレックを中心に、大変繁栄した時期である。ワラタンマー僧もローイレックでなくなり、その跡を継いでヤサーワティ僧 (Cao Yasawati) が長となる。ヤサーワティ僧もローイレックでなくなる (カーンカム 1997: 19-20)。

### 4. 移動と分裂の時代-ナムカムを中心に

ヤサーワティ僧の跡を継いで、キッティワラー僧 (Cao Kittiwala) がチョーティ派の長となる。このころこの地域の政情が不安定になり、チョーティ派僧団がローイレックに来てから81年経った1837年、近隣のチベット・ビルマ系民族カチンや漢人がローイレックを攻め、村に火を放つ事件が起こる。僧たちは戦乱を逃れ麓のカムトゥーン (Kham Toen)

村へ移動する。その後ローイレックの住民がカチンや漢人の攻撃を退け平安を取り戻し、チョーティ派の僧一行を再びローイレックに招じたが、僧たちは戻らず、逆に信者たちが僧一行の留まるカムトゥーン村に集まってきた（カーンカム 1997 : 20）。

キッティワラー僧がカムトゥーン村で亡くなり、その跡を継いでパンチッター僧（Cao Pancitta）が長となる。そのころヤンゴン在住の在家信者たちが、僧団の中からピンヤーワンナ僧（Cao Pinyawanna）とその他数名の僧をヤンゴンに招じた。ヤンゴンへと下っていったピンヤーワンナ僧一行は、ヤンゴンに留まり戻ってこず、カムトゥーン村にのこったパンチッター僧を長とするチョーティ派主流派と袂を分かつことになる（カーンカム 1997 : 21）。

1849年、パンチッター僧一行は各地の信者に招じられて、セーンウィ内のティーマー（Tima）に1年、ムンホーペート（Moeng Ho-phaet）に1年滞在し、次に中国雲南省徳宏地区の芒市内のムンキー地区パーン村（Man Pang, Moeng Khi）に寺院を建てて2年留まる。次にナムカムとムンミットの境界に位置するパーンニム（Pang Nim）へと移動しそこに4年滞在する。さらにムンミット内のヒンロンに再び戻るが、そこにも長居せずナムカム内のマーオ川沿いの土地ローイ・コーンマーオ（Loi Kong Mao）に寺院を建てた。これはインターワラー僧（Cao Intawala）の時代のことである。チョーティ派一行はローイ・コーンマーオに18年留まり、ナムカムの国主もチョーティ派一行の滞在を喜び、信者への徴税を免除し厚遇したという（カーンカム 1997 : 21-22）。

インターワラー僧はここローイ・コーンマーオでなくなり、その跡を継いでチェーヤンタ僧（Cao Ceyanta）が長となる。現在のバゴー管区シタン川流域に位置するシュウェジン（Shwegyin）の信者の招きによりチョーティ派一行はローイ・コーンマーオから南に下り、シュウェジンに7年間滞在した。その後、徳宏地区の芒市の国主の母親の熱心な招きにより芒市に7年滞在した。国主は市内の農園内に寺院を建立し寄進したが、結局人家に近い市内の寺院では騒がしいという理由で芒市を出る（カーンカム 1997 : 22-23）。

芒市を出た後は、ナムカムの国主や篤信の信者たちの熱心な要請により、チョーティ派一行はナムカムに戻り、ナムカムの南西に位置するコーンカラー（Kong Kala）という山中に落ち着く。ナムカムの国主は篤くチョーティ派を庇護したので、19世紀末から20世紀の初頭までの23年間この地に留まった。ここではチェーヤンタ僧、さらにその後継者のキッティナター僧（Cao Kittinannta）、コーウィンタ僧（Cao Kowinta）が亡くなる。これら三僧の時代、つまりチョーティ派のナムカム滞在の前半では、壮麗なチョーティ派寺院が建てられ、チョーティ派の教えが周辺地域に広がっていった（カーンカム 1997 : 24）。

コーウィンタ僧が亡くなった後、スナター僧（Cao Sunanta）が長となるが、この時期にはチョーティ派を巡る混乱と葛藤が生じた。まず第一点は、チョーティ派の信者たちはナムカムにある沼の精霊の慰撫儀礼の負担金を納めなかったので、ナムカムを管轄下におくセーンウィーの国主との葛藤を生む。また、在家信者の集団間にも戒律の遵守をめぐ

り対立が生じた(カーンカム 1997: 24-25)。このような混乱から、スナンター僧は1933年にムンミット内のパーンニムに再び戻り、そこに4年滞在した。その後、1938年にシーポ内のローイクー(Loi Khoe)の信者に請われて、その地へ移る。ローイクーの住民はナムカム時代からの熱心な信者であり、ローイクーには3つの寺院が建てられた。スナンター僧はローイクーで亡くなる(カーンカム 1997: 27-28)。

## 5. ムンミットからモーニンへ

ローイクーに滞在していた頃「日本の戦争」<sup>24</sup>があり、ローイクーでは僧団への食料の供給が難しくなる。そこで在家信者たちはムンミットのほうが土地も広く、食料も豊富であると考え、僧団をムンミットへ招じた。チョーティ派の僧団はムンミット国の中のムンホック(Moeng Hok)の近く、ナートサミートーン山(Nat Sami Tong)の麓へ新しく寺院と村を建設し移住する。その時の僧団の僧の数は43名で、ヤサータンマ僧(Cao Yasathamma)が長であった。ムンミット国内でも、ナートサミートーンからそれほど離れていないムンホック地区のカーイパックナム(Khai Phak Nam)に移動している。ここでヤサータンマ僧とその補佐役であるマンペン僧(Cao Man Peng)が亡くなる(カーンカム 1997: 29)。

ムンミット滞年の時には第二次大戦中で国土が荒廃し、各地からの信者が僧団への寄進に行くのが難しくなり、僧団への寄進が十分にはできなかつたという。例えば、遮放からムンミットへ寄進に出かけた信者4人がその道中で何者かに殺され、それが日本軍の仕業であると噂されるような事件も起こった。チョーティ派僧団は第二次大戦中は戦乱を逃れムンミットに身を隠していたが、戦後にはムンミットの信者が減少したため、1953年に僧団はイラワジ川を渡りカチン州南部のモーニン(Monyin)<sup>25</sup>へと移動する。モーニンはシャン州内の各地とは異なり、シャン人は少数派であるが、古くからシャン人のチョーティ派信徒が多数居住している地域であった。その当時のチョーティ派の長はチェーヤンタ僧(Cao Ceyanta)であった(カーンカム 1997: 29-31)。チョーティ派僧団は現在もこのモーニンに留まっており、キッティタンマ僧(Cao Kittithamma)、パニャーサーラ僧(Cao Panyasara)、ワンナパニャー(Cao Wannapanya)僧がモーニンでの歴代の長である。1980年にビルマ政府が国内の主要な仏教宗派を集めて開催した「ビルマ上座部全宗派合同会議」にはチョーティ派は参加しなかつたが、1986年にはビルマ・サンガの中のツアーダンマ派<sup>26</sup>に所属することとなる(カーンカム 1997: 33-34、チョーティ山寺寺院委員会 2003: 14)。

現在モーニンのチョーティ派僧院<sup>27</sup>が、シャン州、カチン州を中心としたミャンマー国内各地のチョーティ派の信者のネットワーク中心となっており、そのネットワークは中国雲南省徳宏地区にまで広がっている。2003年現在におけるミャンマー連邦内各地域のチョーティ派寺院は、ナムカムに15、ムーチェーに36、ラーイカーに5、パーンロンに5、ムンミットに6、ローイクーに4、キョックメーに2、ナムヤーン・サーイカーオに4、セ

ーンウィに7、ムンモーに5、コーカンに3、ラーシオに5、クンモン・ナーヤーに4、ムンイェンに4（以上シャン州内）、パモーに2、ムンヤーンに10（以上カチン州）、さらにシュウエジンに3（バゴ管区）の合計117カ所に寺院がある（チョーティ山寺院委員会2003：172-175）。なお中国国内については少し資料が古いが、1987年の時点で雲南省徳宏地区の瑞麗県に3、潞西県に18ヶ所の寺院があると報告されている（長谷川1996：88）。2003年5月にはモーニンでのチョーティ派僧団50周年記念行事が開催された。

#### IV 考察

##### 1. 移動の歴史

メンデルソンはチョーティ派を18世紀半ばに登場し、現在まで生き残ったパラマツト（異端派、極端派）であり、現在はシャンの仏教慣習を受け入れているが、元来のパラマツトの教義も保持しているとしている。そこで念頭においているのは、ボードーパヤー王の時代に開かれた宗教会議による仏教浄化と僧団の統一という過程であり、そのなかで異端とされた宗派がビルマの土地を離れ、シャンの人々の間に広まっていったと考えている。しかしチョーティ派はメンデルソンが考えているよりも長い歴史を持っており、アラウンパヤー王のコンパウン朝建設以前に、当時のビルマの王たちによって迫害を受け、移動の歴史を始めている<sup>28</sup>。

少なくともカーンカム氏の著作を見るかぎり、チョーティ派の移動の歴史は彼らの教義やその他の特徴などの内的な要因から直接生じたものではなく、外的な要因、特に政治経済的な要因によるものである。政治的支配者（王や国主）との確執や戦乱による治安の悪化などの政治的要因や、第二次大戦時とその後の経済的困窮などが挙げられる。王や国主からの迫害を受ける場合には、カーンカム氏の著作では、王や国主がしばしば行う積徳行としての寺院・仏塔建設を評価しない、その土地で行われている精霊信仰を受け容れないことにより、その土地の王や国主の不興をかったという理由が挙げられている。

一方、ワーラチョーティ僧の時代、遮放のローイレック時代（約80年）、ナムカム時代（18年と23年）、モーニン時代（約50年）など、政治経済的に安定した環境の場合には、僧団は比較的長期間一カ所に滞在している。これらの長期滞在した土地では、王や国主がチョーティ派に帰依し僧団や在家信者を手厚く保護している。チョーティ派はビルマの土地では王による迫害でその土地を追われたが、移住先であるシャン州や雲南省徳宏地区などでは政治的支配者からある程度の保護を受けることができている。

また新たな移動先も在家信者の招請によってきまっており、王や国主をはじめとした在家信者の側が僧団にいかによい環境を準備できるかが、その地でのチョーティ派の繁栄に結びつくと言える。その意味でチョーティ派のシャン州での展開は、東南アジア大陸部の上座仏教圏に見られる「政治と宗教の補完的關係」を基本的には前提としている。但し、チョーティ派がもつ独特の教義と排他性により、なかなかチョーティ派によい環境を提供

する政治的状況に到らなかったこと、またそのような好ましい政治的状況になったとしても長続きしなかったことが、チョーティ派が移動の歴史を続けてきた理由であると考えることができる。

## 2 チョーティ派の組織—僧と在家信者の関係

チョーティ派の歴史を見てみると、常に僧たちが一つの集団としてまとまって行動している。特にヤンゴンへ下っていった僧がチョーティ派主流派から分かれていった事件の後には、信者のいる各地の寺院に分散するのではなく、常に一緒に移動し、同じ場所に住み、共に修行することが理念とされている。このように僧団の集団性、統一性が強調されるのは、チョーティ派が僧の師弟関係を中心とした僧集団（ガイン）としての性格を強く有しており、分散・分派していくことを避けようとしていることによる。チョーティ派ではワーラチョーティ僧の特別な力が強調されており、僧団はワーラチョーティ僧につながる師弟僧の系譜関係とその維持が重要視されている。

但し、僧団が一カ所に集住しているのに対して在家信者は各地に分散している。そのため、僧団が止住している地域以外の在家信者は僧の存在なしで、自らの仏教実践を行って行かねばならない。このことより、チョーティ派の中心である僧団を別にすると、各地のチョーティ派の在家信者にとって日常では在家者の仏教実践が中心となる。僧に依存しない部分が多いため、在家者自身の仏教実践が重要となっている。各地のチョーティ派の在家信者はその土地での活動の中心として寺院を建てて、これらの寺院には僧は止住しておらず、在家信者のみで維持されている。このように僧が不在で仏像を安置しているだけのチョーティ派の寺院はワット (wat) と呼ばれるため、チョーティ派の信者たちは「タイ・ワット」と呼ばれることもある (カーンカム 1997: 6)。

しかしこのことは、チョーティ派が在家主義的仏教集団であるということの意味するのではない。各地の在家信者はチョーティ派の中心たる僧団の重要性を共有しており、機会があれば自らの土地に僧団を止住してもらおうよう招いている。これもチョーティ派僧団の頻繁な移動の要因の一つである。チョーティ派に関しては在家信者が自派の僧団以外の僧に帰依しないという記述がしばしば見られるが、このこともチョーティ派僧団の重要性を強調するが故であると考えられる。これはチョーティ派がもつ排他的な性格を特徴づけることにもなる。他派の僧に帰依しないため、チョーティ派の在家信者はビルマ仏教の中だけでなく、シャン仏教のなかでも孤立した存在であったと考えられる。

1986年以降、チョーティ派の僧たちはビルマ仏教のツェダンマ派に属するようになったこのことは裏を返せば、1986年まではチョーティ派は独自の僧団を形成し維持してきており、近隣のタイ、ラオス、カンボジアなどの国家サンガ制度の歴史と比べてみると、ビルマでは特に地方において近年になるまで実質的なサンガの統一がなされてこなかったことが分かる。しかし、現在ではツェダンマ派のなかに吸収されたチョーティ派の僧団がどのような影響を受けているかを明らかにすることは今後の課題としたい。

## V まとめにかえて

本稿ではカーンカム氏の『チョーティ派の系譜とその慣習』の中から、チョーティ派の歴史の部分を中心に、宗派の形成史を概観し、そこから見えてくるチョーティ派の特徴を明らかにしようとした。現在のところ資料が限られていることもあり、十分にチョーティ派の歴史を描けたとは言えない。今後筆者は、本稿で概観した宗派の歴史的経緯を詳細に検討し、またそれと同時に、現在のチョーティ派の仏教実践の内実を明らかにしていく必要があると考えている。今後のさらなる研究を進めていく上で考えられる、いくつかの研究の方向性をここで提示し、本稿のまとめにかえてみたい。

①チョーティ派の教義の内実の把握。19世紀初頭に書かれたチョーティ派についての西洋人の記述では、チョーティ派は「異端」であり、その教義はかなり特殊なものであると描かれている。これらの記述の多くは伝聞によるもので、どこまでが事実であるのか不明である。少なくともカーンカムの著書ではワーラチョーティ僧の修行の拠り所となった教義解説書は上座仏教の正統であり、異端的な見解は見られない。そのため、実際のチョーティ派ではどのような教えが説かれ、他の宗派とどのように違うのかを明らかにする必要がある。

②チョーティ派組織の現状。現在ツェダンマ派に所属するチョーティ派僧団はどのような組織を形成しているのかを明らかにする必要がある。僧不在の地方では在家信者の仏教実践が中心となるチョーティ派の場合、たとえ僧団がツェダンマ派に吸収されても、在家信者の組織は継続していく可能性がある。このような場合僧と在家信者との関係はどうなっていくのであろうか。

チョーティ派はローイ・レックの山中に寺院を置いていたので「山の寺院」(Kyong Loi)と呼ばれる。ローイレックだけではなく様々な土地でも、僧団が止住する寺院の多くは町や村落の中ではなく、山中や山麓におかれる。これは世俗との距離を取る「森林住」の伝統を引いていると考えられる。このようにチョーティ派は、教義的には森林住の系統を引くビルマ仏教のシュウェジン派やドワーヤ派などと近いように感じられるが、なぜ「村落住」の伝統を引くツェダンマ派に入ったのかなど、ビルマ仏教のサンガ制度がチョーティ派に及ぼす影響を明らかにしたい。

③民族境界を越境する仏教。チョーティ派のシャン州への展開過程で最も重要な役割を果たした中国雲南省徳宏地区遮放のローイレックでは国主がタアーン(モン・クメール系山地民)であり、この国主の篤信によりチョーティ派はローイレックで繁栄し、シャンとタアーンの両方に信者を獲得している。ビルマからシャンへ、平地民シャンから山地民タアーンへというように、チョーティ派は民族境界を越境しながら広がっていった。またチョーティ派僧団がローイレックを離れるきっかけとなったのは、非仏教徒のカチンと漢族による襲撃であった。このような過程を仏教と民族境界の観点から考察する必要がある。

【附記】

本稿は、平成 15 年度科学研究費補助金・若手研究 (B) 「東南アジア大陸部シャン文化圏における仏教実践の民族的多元性とその動態に関する研究」 (代表: 村上忠良、課題番号: 14710216) の研究成果の一部である。

【注】

- 1 ムンの規模によって国主の名称は異なり、大きいムンの国主はチャオファー (cao fa)、小さなムンの国主はミョーザー (myo za) と呼び分けられている。
- 2 チョーティ派の仏教実践の形態については稿を改めて論ずる予定である。
- 3 現在のミャンマー連邦中央平野の北部を指している。
- 4 ここでのジャドソンはアメリカン・バプテストの宣教師としてビルマに滞在したアドニラム・ジャドソン (Adniram Judson) である。筆者はこのジャドソンのチョーティ派に関する報告は未見である。
- 5 これらの記述以外で、チョーティ派について書かれた一次的資料として重要なものにマンテガツアの著作 (Mantegazza, G.M. 1784 La Birmanie. Rome, Ed. A.S., 1950) があるが未見である。この資料の検討は今後の課題としたい (cf. リード 1993 (2002) : 457)。
- 6 正式な著者名はカンカム・サンサム (Kan Kham Sang Sam) で、カンカムとサンサムに分かれる。カンカムは、シャンの仏教実践の中にポーイ・パラという仏像奉納儀礼があり、その儀礼の主催者を務めた者 (パラ・タッカー) に与えられる「儀礼名」である。サンサムのサンは見習僧としての出家経験を表す敬称であり、サムは生まれたときに親がつけた名である。著者はカンカム、サンサムの両方で呼ばれているが、本稿では儀礼名の方が公的な場に相応しいとされるのでカンカム氏とする。
- 7 本稿では、カンカム氏が記述する年号とビルマ史の中で定説となっている年号の間に差が見られるが、カンカム氏の著作の年号をそのまま挙げている。またチョーティ派の歴史については、チョーティ山寺寺院委員会編集の『ムンヤーン市・チョーティ山寺 50 年の記録』の記述もあるが、カンカム氏の著作との年代が一致しておらず、さらにビルマ史の年代とも合わないため、いずれの歴史記述からも「正しい」年代を導き出すことが現時点では出来ない。本稿ではカンカム氏の著作で記述されたものを基にチョーティ派の歴史を描いてみる。チョーティ山寺寺院委員会編集本が提示する歴史記述については稿をあらためて検討したい。
- 8 (カンカム 1997 : 7-9)。中国側にもチョーティ派の始祖僧についてのいくつかの伝承が存在する。ここで紹介した伝承と多少の異同はあるが、その多くは洞窟や崖で修行をしている僧に獵師が誤って弓を射かけたが命中せず、その僧の教化により獵師や周囲の人々が帰依するという内容となっている (長谷川 1996 : 91-93)。
- 9 ワーラチョーティ僧の誕生年については、カンカム氏の記述とチョーティ山寺寺院委員会の記述は一致していない。チョーティ山寺委員会は 1617 年としている。誕生年の年代確

認も今後の課題としたい。

10 ここでのムンモーはシャン州の州都タウンジーの西方、現在のカラー、アウンバン、ピンダヤ周辺の地域の地名である。

11 ビルマ・シャンの仏教文化圏では見習僧として出家する前段階として、在家のまま寺に寄宿し仏教や寺院の基本的な知識を身につける期間がある。このようにして寺に寄宿する男子をタペーチョーン (tape kyong) と呼ぶ。

12 最初にワーラチョーティ僧に帰依した「日曜王」は在位の年代と日曜日に即位した点(生野 1985 : 249) からサネー王 (在位 1698-1714) ではないかと推測できるが、シャン語名タナンノイ (Tanang Noi 太陽) は明らかにビルマ語からの借用語で、太陽王タニンガヌウエ王 (在位 1714-1733) と推測できる。

13 ビルマ仏教では、戒律の規則に適合か抵触かを判定する長老 (僧) を「戒脈伝燈師」(Vinayadhara) という (生野 1985 : 25-256) 。このウィネートーとは「戒脈伝燈師」のことであると考えられる。

14 退位の時期がビルマ史の年代と1年違うが、在位年代に近いものとしてはタニンガヌウエ王 (在位 1714-1733) ではないかと推測できる。

15 即位の時期に近いものとしてはマハダムマヤザ王 (在位 1733-1752) が挙げられるが、推測の域を出ない。

16 在位の年代から考えると、マハダンマヤザ王ではないかと推測できる。

17 戦乱期 (1751-1453) に数年の差があるが、戦乱のビルマを平定し新たな王朝を開いたという点、シュエボ出身という点から見て、コンバウン朝を建設したアラウンパヤー王 (在位 1752-1760) であると推測できる。

18 シャン州以外では、ワーラチョーティ僧やナンタマーラー僧の時代に、チンドウィン川上流、サガイン管区北部、カボー溪谷の北に位置するタイ系民族タイ・レーン (Tai Laeng) の居住地マクランソンソップ (Mak Lang Song sop) にも広がっていった (カーンカム 1997 : 14) 。ビルマ名ではタウントゥツ (Thaungdut) 。但し、現在この地にはチョーティの信者は存在していない。

19 (カーンカム 1997 : 16) 。正確には雲南省徳宏タイ族ジンポー族自治州潞西県遮放鎮周辺。コーオーンとはシャン語で「小さい橋」を意味し、著者のカーンカム氏によると中国国内では「小橋」 (Saew Khaew) と呼ばれている。

20 著者カーンカム氏とのインタビューより。タアーンはパラウンの中国語名「徳昂 (ドゥアン)」と同語源であると考えられる。

21 ローイレック近隣にはシャンやタアーン以外に、ジンポー族や漢族も住んでいた。ジンポーや漢族にはチョーティの教えは広まらなかったようである。後述のジンポー族と漢族によるチョーティ派襲撃事件を参照のこと。

22 「ワ州」とはワ (Wa) 人が多く住む地域の俗称であり、シャン州北部のサルウィン川以東地域の南半分をさす。シャン語ではその地にあった首長国の名からムンルーン (Moeng



Lern) と呼ぶ。

23 シャン州内のサルウィン川東岸地域で漢族系住民(コーカン人)が住む土地をさす。「ワ州」の北に位置する。

24 第二次大戦時における上ビルマからシャン州への日本軍の侵攻のこと。

25 シャン語ではムンヤーン Moeng Yang

26 ビルマ上座部全宗派合同会議で政府から公認された教派の一つで、従来のサンガ組織を継承する最大教派である。

27 モーニンのチョーティ派僧院の正式名称は、シャン語ではウィーハーラパンニャーランカーラ(チョーティ) Wihara Pannya langkala (Coti)、ビルマ語ではパニャーランカーヤジャウン Panya langkaya Kyaung。

28 メンデルソンはスコットの記述に従いシャン州のチョーティ派はビルマ仏教の非主流派パラマットの一つであるとしているが(Mendelson 1975: 77)、この点に関してはアンソニー・リードから批判がなされている。リードはチョーティ派がボードーパヤー王の数代前、つまり18世紀半ばには成立しており、19世紀以降にビルマ仏教内に出現する非主流派の諸教派パラマットとは別であると指摘し、メンデルソンは18世紀のチョーティ派と19世紀以降のパラマットを混同していると批判している(リード1993(2002): 457-458)。

#### 【参考文献】

(英文)

Cushing, J.N. 1914 (1971) A Shan English Dictionary. Farnborough, Hants., England: Gregg International Publishers (second edition published in Rangoon: American Buptist Mission Press, 1914)

Mendelson, E. Michael 1975 Sangha and State in Burma: A Study of Monastic Sectarianism and Leadership. Ithaca: Cornell University Press.

Milne, Leslie 1910 Shan at Home. London: John Murray.

Sangermano, Vincenzo 1833 (1995) The Burmese Empire a Hundred Years Ago. Bangkok: White Orchid Press (originally published in London: Archibald Constable and Co., 1833)

Scott, George J. 1906 (1999) Burma: A Handbook of Practical Information. Bangkok: Orchid Press (originally published in London, 1906)

Yule, Henry 1858 A Narrative of the Mission to the Court of Ava in 1855. London: Oxford University Press.

(シャン文)

- Cum Kopaka Wat Kyong Loi Coti 2003 Mai kum Pi Kon Kham Kyong Loi Coti Weng Moeng Yang.  
Moeng Yang ( Mohnyin ), Kachin State. ( チョーティ山寺寺院委員会 『ムンヤーン市・チョーティ山寺 50 年の記録』 )
- Kan Kham Sang Sam, Khing 1997 Long Khoe Coti lae Phing Phasa. Lashio, Shan State.  
( カーンカム・サーンサム 『チョーティ派の歴史と慣習』 )

(和文)

- 生野善應 1980 『ビルマ上座部佛教史』 山喜房佛書林  
1995 『ビルマ佛教—その実態と修行』 (新装版) 大蔵出版
- 長谷川清 1996 「上座仏教圏における「地域」と「民族」の位相—雲南省、徳宏タイ族の事例から」 林行夫 (編) 『東南アジア大陸部における民族間関係と「地域」の生成』 文部省科学研究費補助金重点領域研究「総合的地域研究」成果報告シリーズ: No.26
- 石井米雄 1975 『上座部仏教の政治社会学』 創文社
- リード、アンソニー 1993 (2002) 『大航海時代の東南アジア 1450-1680 年 II—拡張と危機』 (平野秀秋・田中優子訳) 法政大学出版局